

「屋根のない病院」を 受け継ぐ大河の一滴として

稲葉 俊郎

2020年3月11日に、家族と軽井沢へ引越した。奇しくも、自分の人生に大きな影響を与えた2011年3月11日の東日本大震災からびつたり9年後のことだ。

1998年、大学入学と共に山岳部に入部し、長野の山々を春も夏も秋も冬も歩いた。東京大学医学部山岳部が60年近く続けている山岳診療所が穂高山域にあり、夏には特急あずさや高速バス、時には自転車ですり高地まで行き、登山と山岳診療に携わった。長野に年間100日は滞在するほど山の魅力にとりつかれていたが、軽井沢に立ち寄ったことはなかった。浅間山が活火山だったことがその理由だろう。

2004年に医師となり医療現場で働き始めた。現実の病院での医療行為に違和感を感じたが、その正体は掴めなかった。ただ、何かが違う、とだけは思い続けていた。

2011年3月11日、東日本大震

災が起きた。大学院生の立場ですぐ医療ボランティアに入った。現地では薬もカルテも何もなく、病院自体がない。現場で何もできず、医療者もうなだれていた。ただ、何もなくてもベストを尽くすのが医療のプロではないかと強烈に感じた。山岳医療での経験も影響していただろう。

そこでふと我に帰った。もつと医療全体、むしろ社会や地球全体の視点を持たないといけないのではないか、自分はなんのために医者になったのだろう、と。学生時代、薬や手術の治療だけではなく、もつと大きな視点で医療を捉えていた。人が元気になるためにはどうすればいいのか、完治できなくてもその人が生きやすい社会とは何だろう、と。視点が原点に戻ったとき、今まで堰き止めていた思いと言葉が溢れて止まらなくなつた。そこから、執筆活動などの表現活動を始め、自分なりに理想の医療の場の青写真を考え続けた。

医療は孤立したものではない。文化や芸術、自然や生活と結びついた「いのち」あるものだ。医療は病院という狭い場で完結するものではない。自然と人間との関係性の中でこ

そ考えなおす必要がある。「自然治癒力」は、まさに「自然」から与えられた力なのだから。2011年に与えられた問いを、自分なりに考え続けたが、そう簡単に答えは出なかった。

2019年9月、妻の実家である上田に行ったとき、ふと軽井沢に立ち寄った。軽井沢を車で走っている時、自分は軽井沢に住む、という直感が不意に訪れた。軽井沢はどの都市や町とも違っていた。ここは人間が中心ではなく自然こそが中心にあった。自然は人間と違い、ニュートラルで中立な存在だ。誰にも平等に優しく、誰にも平等に厳しい。自然こそが中心に据えられた軽井沢町の「いのち」を感じ、魂が震えた。宣教師たちが、軽井沢は「屋根のない病院」と呼んでいたことを知識としては知っていたが、体感として理解した。自分がこれまで抱えていた違和感にひとつの光の道筋を与えられた気がした。「屋根のない病院」をこそ、自分は取り組みたいのだ、と。帰りの新幹線で、妻に軽井沢に引越すことを提案した。子どもの将来を考え、軽井沢風越学園の存在も大きかった。2019年10月に再

度軽井沢を訪れ、自分の理性と直観とが対話し、最終確認を行った。2020年1月には東大病院に辞表を出し、3月11日に軽井沢に引越し、今に至る。東日本大震災で自分に与えられた問いに対して、9年後に出した解答だ。

軽井沢を守り、育ててきたすべての先人に深い敬意を抱く。人の思いは形となり、時を越えて軽井沢を形づくった。いのちは形を変えて今も生きていく。未来を見据えた先人の思いを受け継ぎ、自分も少しでも軽井沢に貢献できればと、思う。

(軽井沢病院 副院長・総合診療科医長)

軽井沢の思い出

川端香男里

川端康成の随筆に「軽井沢だより」というのがあって、それによると昭和十一年八月の末に神津牧場へ旅をし、山をおりて軽井沢に「迷いこんだ」とある。夕方になって旧軽井沢に着き、つるやに泊まろうとしたが満員で断わられて手前の神宮寺のところにある藤屋に泊った。當時も夏となれば軽井沢も満杯で、藤屋も普通の部屋はなく、三階の山歩きの学生用の「妙な部屋」に通されたという。し